

Title	『諸蕃志』の賓率国(ファンスール)と竜腦(カンフル)・補論
Sub Title	The country of Pin-su (Fansur) and Lun-nau Perfume (Camphor) mentioned in Chau-fan-chi (II)
Author	池永, 佳昭(Ikenaga, Yoshiaki)
Publisher	三田史学会
Publication year	1977
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.48, No.3 (1977. 10) ,p.43(269)- 58(284)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19771000-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『諸蕃志』の賓宰国と竜腦・補論

池 永 佳 昭

目次

- 一、序
- 二、賓宰国の記事
- 三、竜腦の種類と採出方法
- 四、竜腦の産地
- 五、むすび

一、序

「史学」四十八卷一号（昭和五十二年一月刊）に『諸蕃志』の賓宰国と竜腦」と題する小文（以下前稿とする）を發表する機会を得たが、それによると、南宋の理宗の宝慶元年（一二二五）に發表された『諸蕃志』巻下の冒頭に記述のある腦子（camphor）すなわち竜腦の条に紹介のある「賓宰国」とはアラブ史料にある Fantsour という竜腦の産出地が中国に伝えられたもので、その場所はスマトラ西岸の現在のバルスではなく、バルスに近い所の山中を示し

ていると思える「班卒」という地名（『鄭和航海図』）と一致するようで、ポルトガル人、トメ・ピレスの『東方諸国記』に述べてある（十六世紀の頃の）メナンカボ族を中心とする国（バタク族もふくむ）と一致するのではなからうかと言うものであった。勿論、北緯0度から3度までを竜腦の産出地と考えての事であった。当時（一九七五年執筆時）の私の考察の目的は「賓宰国」と〈Fantsour 国〉との関係が中心で、それらの国とスマトラ島西北部の竜腦の産出地方を示しているアラブ人の言う Balus の島（婆魯師、婆律国等と一致する）と如何なる関係があるのかを考えてみることであった。そして竜腦の産地である山間部やその採取方法については発表枚数の関係で省略してしまった。今回はその補遺（補論）として『諸蕃志』の腦子の条で

前回考察しなかつた部分を中心に産地、採出方法等を考えてみようと思う。

最後に、スマトラ島の方位については研究者の間で統一した表記がなされていないようなので、本稿ではとりあえずマラッカ海峡側を東岸、現在のバルス地方のあるインド洋側を西岸と表わすことにした。

また、補論を発表するにあたり御指導を頂いた松本信広、前嶋信次両先生に心から感謝の意を表するものである。

一、賓宰国の記事

『諸蕃志』卷下、「志物」の冒頭にある腦子の条全文（函海本）は次の通りである。

(イ) 〔腦子出渤泥国一作 仏尼、又出賓宰国。世謂三仏齊亦有之

非也。但其国拋諸蕃来往之要津、遂截断、諸国之物聚於

其国、以埃蕃舶貿易耳。腦之樹如杉、生於深山窮谷中。

經千百年支幹不曾損、動則臙有之。否則腦随氣泄。

(ロ) 土人入山採腦(a)、須数十為羣、以木皮為衣、賣(ハ)賣、

齎(ハ)のこと）沙糊為糧。分路而去、遇腦樹則以斧斫記。至十余株、然後截段均分各以所得。

(b)解作板段、隨其板傍橫裂而成縫、腦出於縫中、劈而取之。

(イ) 其成片者謂之梅花腦以狀似梅花也。次謂之金脚腦。其碎者謂之米腦。碎與木屑相雜者謂之蒼腦。取腦已淨其杉片謂之腦札。今人碎之與鋸屑キョセツ（のこくず）相和、置瓷氣(学津討原本作「瓷器」)中、以器覆之、封固其縫、煨ワイ（うづみ火）以熱（熱の俗字）灰、氣蒸結而成塊、謂之聚腦、可作婦人花環等用。又有一種如油者謂之腦油、其氣勁而烈祇可浸香合油。

〔ハ〕は前稿で考察した部分であるので、本稿では省略したい。ただ、(イ)の傍線「截断」については前稿とは幾分異った考え方もできるので試論としてではあるが、次に紹介してみたい。

筆者は前稿で「其国拋諸蕃来往……聚於其国」について、「其国（三仏齊）は、諸外国の船が往来する要津（かなめなる港）になっており、ついに諸国の交易品を截断（切断）し、其の国に集める。」と考えてみた。と言うのは、す

でヒルト、ロックヒル両氏、馮承鈞氏の見解⁽¹⁾であきらかなように中国文の構文から考えて以上のように読んだ方が適切ではなからうかと思えたからである。そして、この部分の意味は前稿(三五—三六頁)の解釈のまゝで十分理解できるように思える。ただ、「截断」それ自体の読み方から考えると今一つの考え方も可能ではなからうかと思えるのである。たとえば、前文を

其国拋諸蕃來往之要津、遂截断〔貿易路〕、諸国之物聚於其国、以俟蕃舶貿易耳。

とし、截断の下に「貿易路」またはそれに類する語が脱字になっているのではなからうかと考えてみた。

そして、もしもこのような考え方がゆるされるならば、「截断」とは三仏齊の官船が「交通路」すなわちパレンバンに近いマラッカ海峡の航路を遮断(コントロール)する、という意味ではなからうかと思え、三仏齊に入港しない商船は中国の広東等へ行けなくなるように仕向けられたのではなからうか。そのようなことから中国等への航路(マラッカ海峡内の一部)を三仏齊官船が封鎖してしまう

こともあったであろう。たとえば、「諸蕃志」三仏齊の条の「若商舶過不入、即出船合戰、期以必死。故〔諸〕⁽²⁾国之舟輻湊焉。」(前稿、三五頁)という記述からも考え得ると思える。すなわち、前稿で述べたように三仏齊国の強い政策によって諸外国の貿易船はパレンバンの港に入ること余儀なくされるので、当然積載物も集(聚)まったことであらう。そういうところに宋代の三仏齊が繁栄した理由があったのかもしれない。すくなくとも幾つかの理由の一つにはなるのではなからうか。

このように貿易港三仏齊の性格については前稿の考え方でいいと思えるが、「截断」それ自体の意味から考えてみると、以上のような考え方も可能ではなからうかと思えたので一試案として紹介をこゝろみてみた。識者の御教示を願うものである。

次に本稿の目的である「諸蕃志」腦子の条(以下本文とする)、(四)・(イ)の部分について考えてみたい。まづ、趙汝适が本文を書くにあたって参照、引用したと思える十二世紀の葉庭珪の『香譜』(前稿三六頁)の全文は次の通りで

ある(一)は前稿で考察の部分)。

〔葉庭珪云。渤泥、三仏齊亦有之。乃深山窮谷千年老樹、枝幹不損者。若損動則氣泄無腦矣。〕^(c)其土人解為板。

板傍裂縫、腦出縫中劈而取之。大者成片、俗謂之梅花腦。

其次謂之速腦。速腦之中又有金腳。其碎者謂之米腦。鋸下

杉屑與碎相雜者謂之蒼腦。取腦已、淨其杉板謂之腦本札。

與鋸屑同擣碎和、置磁盆中、以笠覆之、封其縫。熟灰煨^ワ

煖(あたためる)、其氣飛上凝結而成塊、謂之熟腦。可作

面花耳環佩帶等用。又有一種如油者謂之腦油、其氣勁于腦

可浸諸香。

本文と葉庭珪の『香譜』とを比較すると、本文(イ)の傍線と(ロ)の(a)の部分は『香譜』にはない新しい重要な記事で、趙汝适が書き加えたものと考えられる。(イ)の傍線と(ロ)の(a)以外は両書とも内容は同じである。すなわち趙汝适が『香譜』から引用したものであろう。本文で一番重要な記事はやはりこの(イ)の傍線と(ロ)の(a)の部分ではなからうか。

三、竜腦の種類と採出方法

(一)、本文の(ロ)考察

(a)の文によると、原地人が山(森林)に入って竜腦を採取する時は、数十人が一組となる。彼らは木皮でできた着物を着ており、沙糊 sago を弁当としている。ということである。

「以木皮為衣」についてであるが、木の皮の衣がどういうものであったかは『諸蕃志』の本文のみでは推定ができないし、葉庭珪の『香譜』では「木皮」それ自体の説明もない。ただ、木の皮の衣については二つの考え方ができるのではなからうか。一つは、竜腦の産地に住む住民が竜腦を採取する時に、木の皮で作られた特別の着物を着て「深山」に入った、と考えることで、今一つは当地の住民の日常の服装が「木皮」すなわち樹皮を体にとっていたのではなからうかとするものである。あるいはまたその他の考え方もあるかもしれない。この点に関しては私には不明であるので、ここでは述べることができない。今後の研究としたいので、識者の御教示を頂きたい。

沙糊 sago については十三世紀のイタリア人、マルコ・

ポーロが彼の旅行記の中でファンズール王国の記事と共に次のように述べている。

「(A) Fansur は独立王国である。人民は王を戴き、偶像教徒である。そして大汗 Great Kaan の臣下であると言明している。彼らもまた今まで述べてきたこの島(スマトラ島)に住んでいるのである。この王国には世界で最も質の良い Fansur Camphor と呼ばれるカンフォール(竜脳)が産出する (In this kingdom grows the best camphor in the world)。すなわち他の如何なる地方の(カンフォール)よりも高価なのである。なんとその重さ分だけの黄金で取り引きされるのである。この国には小麦や他の穀類はなく、住民は米とミルク(具体的に何を指すのかは述べていない)を常食としている。また、酒もあるが、それは前に記した(マルコ・ポーロの samatra ー後述、蘇門答刺ー国の条)樹から得られるのである。(B)、さて、次に皆様に世にも不思議なお話しましょう。といいますのは、この地方では樹から「小麦粉のような」粉末が取れるのです。それはつぎのようなことなので

す。その樹は太くて丈の高い種に属し、樹の中は粉末で一杯なのです。この樹の材質は樹皮が恐らく指三本分の幅があり、のこりすべては髓、すなわち粉末なのです。さらに、この樹は非常に大きい(直径のこと)ものですから、大人二人がかりでやっと一本の樹を取巻くことができるのです。この粉末は水のいっぱいはいった桶の中に入れられ、棒でかきまわされるのです。「そのようにすると、その中の」繊維と不純物(英訳文には chaff and rubbish とあるが、マースフィールド版の訳語 'the fibres and other impurities' の方が内容から考えて適切と思えたので書き替えた⁽³⁾)が水面に浮び上がるのです。そして粉末は底に沈みます。そのようにした後で、水を徐々に流し出してしまいます。そうすると純粋な粉末が桶の底にのこるのです。それからそれ(粉)が調理され食用となる色々な種類のものに作られるのです。たとえば菓子とかそれに類するようなもので我々が小麦で作るような種類のものなのです。その味は非常にいいのです。マルコ氏とその一行はそのパンを幾度もくく食べたので経験としてよく知っている

のです。さらにマルコ氏はその粉とまたそれで作られたパンを少しばかり持ち帰りました。このパンの味はむしろ大麥のパンのようでありました。……」⁽⁴⁾

(A)のファンズール国は『諸蕃志』の賓宰国のことと思えるので後ほど考察したい。(B)は「沙糊」についての詳細な記事でマルコ・ポーロの実際の経験にもとずいたものと思える。すなわち、マルコ・ポーロ自身スマトラ島で寄港したある国での体験を竜腦で有名なファンズール国(山間国)の記事の中に加えたものではなからうか。

次は(ロ)の「分路而去」以下と(b)の一部について考えたい。ヒルト、ロックヒル両氏は次のように翻訳している。⁽⁵⁾

They go in different directions, and whenever they find any camphor-trees, they fell them with their hatchets, and mark as many as ten or more; they then cut these into lengths and divide them among themselves equally, after which each one cuts his share into boards; these again they notch along the sides and cross-wise so as to produce

chinks, and the camphor collecting in these is got out by forcing a wedge into them.

ここで考えてみたいのは傍線(i)と(5)の部分である。(i)でヒルト、ロックヒル両氏は竜腦樹を発見したら斧で樹を切り倒す(fell)としておられるが、私は「竜腦樹を発見したら斧で樹の一部をけづり(斫^{シヤク}斫)目印(記)とする(切り倒すのは十余株になった後)。」と考えてみた。そして「至十余株」については「発見された樹が十余株になると」という意味と考えるが如何であらうか。

次の(5)は原文を「然後截段均分。各以所得解作板段。」と考えて翻訳されているように思え、馮承鈞氏も同様な読点をつけておられる。⁽⁶⁾この部分の読み方は色々考え方もあるように思えるが、私には「然後截段均分各以所得。解作板段。……。」と読んだ方がいいように思える。本文(ロ)の傍線(a)は、前述のように『香譜』にはない文章で、趙汝适が書き加えたものと思え、つゞく傍線(b)は葉庭珪の傍線(c)の表現を書き替えたもので内容は同じである。と言うことは、(ロ)の(a)は『諸蕃志』の独自の文章で、趙汝适が書き入

れたものと考えられるから、「……均分各所得。」で区切る方がいいと思える。そして、文意は「竜腦樹が十余株になると、各グループごとに発見したそれぐの竜腦樹（各、以^テ所得）を「樹の根本から」切断してしまい、幹を等間隔（均分）に分断する。」と考えられる。

次に傍線(b)であるが、これは葉庭珪の傍線(c)を書き替えたもので内容は同じである。意味は「樹を」解いて材木の段片（板段）にする。そしてその板の側面から横に削いていく。そのようにしていくとその中に縫（すきま）がある部分がでてくる。竜腦はその縫の中にあるので裂いて腦を取る。」ということになろう。

(二)、本文(i)の考察

(i)は竜腦の種類を述べたものである。分類すると次のようになる。

- (1) 梅花腦 花びら（片）のような形をしているものを言う。形が梅の花ににているからである。
- (2) 金脚腦 (1)よりおとるものを言う。
- (3) 米腦 (2)の碎けているものを言う。

(4) 蒼腦 米腦と木屑が混じっているものを言う。

(5) 聚腦 竜腦を取り終えてから、竜腦のついていた杉片（木片）をきれいにしたものを腦札という。

現代人（宋代の人）はこの腦札を碎いて鋸屑（のこくず）と混ぜあわせ、瓷氣（葉庭珪は磁盆とする。瓷器。）の中に入れて蓋（器に）をし、瓷器と蓋の隙間を固く封ずる。そして瓷器を熱灰で暖める。そこで「瓷器の中の」竜腦の気が蒸発し、集（聚）まってかたまりとなる。これを聚腦という。これは婦人の花環等に用いられる。

(6) 腦油 一種の油のようなものをいう。その匂いは強くかつ激しい。であるから、香料を浸して〔腦〕油とまぜ合わせた方がよろしかろう。

この分類方法は『香譜』と同じであるので趙汝适がこの書から引用していることは確かだと思えるが、表現を異にする名称もあるので異なる点を比較しておきたい。(2)の金脚腦は『香譜』では速腦となっており、速腦の中に金脚腦

があるという。(5)に述べてある脳札は『香譜』では脳本札となつてゐるが、脳本札は「脳木札」の誤字だと思える。⁽⁷⁾また、(5)の聚脳は『香譜』では熟脳となつてゐる。そして葉庭珪は「熟灰煨燻」としてゐるが、この意味は熟灰すなわち熱い灰で温める(煨燻^{ウイボク})ことで、趙汝适は「煨(うづみ火)以^ニ熟灰」と表現した。葉庭珪はカンフルを含んだ木片が熱せられることに重点を置いたが、趙汝适は瓷器の中でカンフル分が聚まつて塊^{かたまり}になることに重点を置いたということになるう。

四、竜腦の産地

スマトラ島における竜腦の産出地については前稿の三、「バルス国(婆律国)とパンスール(賓宰国)」の条で、中国史料、アラブ史料、ポルトガル史料(トメ・ピレスの書のみ)から考えてみた。今回はそこで述べた考え方を基本として前回收利用しなかつた史料を中心に補足考察したい。

(一)、『星槎勝覧』の阿魯国

明代、十五世紀の前半の頃であるが、有名な鄭和の南海

航海いわゆる「遠征」に随行した費信の『星槎勝覧』⁽⁸⁾の阿魯国(東岸)の記事から考えてみたい。いわく、

其国與九州山 chiu-chou chan 相望、自滿刺加 Man-lakia (Malacca) 順風三昼夜可至。其国風俗氣候與蘇門答刺 Su-mēn-ta-lā 大同小異。田瘠少收、盛種芭蕉、椰子為食。男女裸体、困梢布。常駕独木舟入海捕魚、入山採米腦香物為生。各持藥鏃弩防身。地產雀頂(雀は鶴の俗字)、片米糖腦、以售商船。貨用色段、色絹、磁器、燒珠之屬。(紀錄彙編本による)。⁽⁹⁾

このように阿魯国には竜腦を産するというので、まづ、この国と阿魯国週辺諸国との地理的な關係を当時の史料から考えてみたい。

この記事によると阿魯国はマラッカから順風で丸三日で至るといふ。そして風俗や氣候は蘇門答刺国と大同小異だといふ。費信と同様に鄭和の航海に随行(第四次、第六次、第七次遠征)した馬歡⁽¹⁰⁾の『瀛涯勝覧』には、啞魯国として、

自滿刺加国開船、好風行四昼夜可到。其国有港名淡水港

一条、入港到国。南是高山、北是大海、西連蘇門答刺国界、東有平地⁽¹¹⁾。

と記している。これによれば、マラッカから啞魯国まで好風で四昼夜かかるという。そして、この国の南には高山があり、北が大海で西側に蘇門答刺国があり、東は平地であるという。蘇門答刺国については同じく『瀛涯勝覽』蘇門答刺国の条に次の記述がある。

蘇門答刺国、即古須文達那国是也。其処乃西洋之綫路、宝船自滿刺加国向西南、好風五昼夜、先到浜海一村、名荅魯蛮、繫船、往東南十余里可到。其国無城郭、有一大溪皆淡水、流出於海、一日二次潮水長落、其海口浪大、船隻常有沈沒。其国南去有百里数之遠是大深山、北是大海、東亦是高山、至阿魯国界。正西辺大海、其山連小国二处、先那孤兒王界、又至黎代王界⁽¹²⁾。

マラッカから蘇門答刺国に行くには、まづ好風で五昼夜西南の方に進み、荅魯蛮という一村に入港する。そして荅魯蛮から東南に十余里の所に「都」がある。『星槎勝覽』（紀録彙編本）には「自滿刺加順風九昼夜可至、其国傍海

村落、田瘠少収⁽¹³⁾」としている。旅程は風向や風の強さによって変化があるので、マラッカから阿魯国までを三、四日、同じく蘇門答刺までを六、九日と考えたい。また、蘇門答刺国の南百里ばかりの所に大深山があり、北は大海である。東には高山があつて阿魯国と接している。正西は大海に接し、また其山（正西）は二小国に連なっている。まづ那孤兒国、そして黎代国であるという。

那孤兒国については『瀛涯勝覽』蘇門答刺国の条に、那孤兒王、又名花面王、其地在蘇門答刺西、地里之界相連、止是一大山村、但所管人民皆於面上刺三尖青花為号、所以稱為花面王、地方不広、……⁽¹⁴⁾とあり、黎代国については同書、黎代国の条に、黎代之地、亦一小邦也、在那孤兒地界之西、此処南是大山、北臨大海、西連南淳里国為界、……

とある。そして南淳里国については、同書南淳里国の条に、自蘇門答刺往正西、好風行三昼夜可到、其国辺海人民止有千家有余、皆是回回人、甚是朴実、地方東接黎代王

界、西北皆臨大海、南去是山、山之南又是大海、……
国之西北海内有一大平頂峻山、半日可到、名帽山。其山
之西、亦皆大海、正是西洋也、名那沒嚒 (Lamuri) 洋。
……
とある。

次にこれらの史料の地名が現在のどの地方にあたるかを
考えてみたい。まづ、蘇門答刺国であるが、十六世のポ
トガル人、トメ・ピレスの『東方諸国記』は、

「パセー王国にはパセーと呼ばれる都市がある。ある人々
は同市をサモトラと呼んでいる。全島でこれほど誇り高い
場所はないので、この島は当市の名で呼ばれるようにな
り、「市は」別の名前「パセー」でも呼ばれるようになって
たのである。当市は二万以上の住民を持っている。⁽¹⁵⁾」

と、スマトラ西北部でサモトラと呼ばれたパセーを中心と
する一地方が島全体を指す「スマトラ」という名称の発祥
地であったことを説明している。サモトラと蘇門答刺は同
国だと思える。Mills 氏はこの Semudera (Samudra)
を Lho Seumawe 地方とその周辺にちがいないとしてい

る。⁽¹⁶⁾

このパセ地方を中心とする蘇門答刺国の西側に小国、那
孤兒と黎代の二国がある。那孤兒は山間国のようなものである。

黎代は北が大海に臨んでおり、南が大山で西側が南淳里国
である。黎代国はトメ・ピレスの言うリデー Lidee 王国⁽¹⁷⁾
のことと考えられる。Mills 氏は Lide (黎代) は元来、
[M.]ridoe' というような名称を持っていたのではなかる
うかとし、現代の Meureudu 地方に位置していたと考え
ている。⁽¹⁸⁾

黎代国の西が南淳里 Nan-P'o-Li 国であるが、南淳里は
蘇門答刺から正西に三昼夜好風で航行すると至るといふ。

この国の西北はすべて大海に臨み、南に行くと山があり、
山の南はまた大海がある。西北海中には、船で半日ばかり
の所に一島があり、その山は高くて険しいが、山頂は平に
なっている。そこで中国人は「帽山」すなわち帽子のよう
な形をした島 (Wai 島のことであろう) と名づけた。⁽¹⁹⁾ この
山の西は大海で那沒嚒洋 (Lamuri の海) という。以上の
内容から明代十五世紀の南淳里国はスマトラ島西北端に位

置するかなり広い国であることがわかる。南淳里の東側に黎代国 (Meureudu 地方) があるが、黎代は海岸に面する小さい領域の国と思われるので、黎代の南の山間部地方から西岸 (インド洋側) のかなり南部まで南淳里国であつたらうと思える。

この明代の南淳里国を十三世紀の前述マルコ・ポーロは Lanbri 王国として伝えている。すなわち、

「[ランブリ国には] 蘇木 brazil-wood が非常に沢山ある (生育していること)。またカアンフォル (竜腦) そして他の高価なスパイス (香辛料) が色々ある (They also have camphor, and other kinds of precious spices)。⁽²⁰⁾」
と云うことである。蘇木がこの国に生育していることについてはイブン・フルダードベも述べていたが (前稿三八頁)、竜腦の場合は英訳文から考えて他のスパイスと共に商品として存在していた (Have とあるように) のではなからうかと思える。

マルコ・ポーロの Lanbri 国は地理的に考えて前稿 (三八~三九頁) で引用した九世紀のアラブ地理学者 Ibn

Khordādbeh の Rāmi の島、また通称『スレイマンの旅行記』(『中国とインド物語』) の al-Rāmi (Lanbri) の島のことと考えられる。さらに、al-Rāmi (Lanbri) の島には金鋏があつて、Fantsour という土地には上質のカアンフォル (竜腦) が産出するといふのであるから、この Fantsour 国はマルコ・ポーロの Fansur 国と一致するようである。竜腦樹は『諸蕃志』でみたように深山窮谷中にあるといふのであるから、マルコ・ポーロのファンスール国は南淳里国 (Lanbri) よりかなり南 (南東の方) の山間部に位置することになる。それでは、このファンスール国 (寶率国と一致する) と竜腦を産するといふ阿魯国とはなにか関係があるのであろうか。次に考えてみたい。

(二) 阿魯国の中の竜腦の産出地と寶率国との関係

『瀛涯勝覽』の啞魯国の条によれば、この国は蘇門答刺 (パセを中心) の東側に位置するといふのであるから、トメ・ピレスのアル王国 Daruu (de + Aru) と一致するようである。現在のアル湾地方を中心とした地域と考えられるが、Mills 氏はそれより南、東岸 Deli 地区の Belawan

(3°47'N, 98°41'E) 附近として⁽²¹⁾いる。この地方(パセの東)に位置していた阿魯国の産物は「雀頂、片米糖腦」で、これらを商舶に売っていたという。片米糖腦とは、片腦、米腦、糖腦のことで、前述『諸蕃志』の分類によると片腦は梅花腦のことで、米腦は③の米腦にあたる。糖腦は葉庭珪も趙汝适も述べていなかったが、米腦(米粒の大きさ)よりも小さな粒の竜腦のことであろう。雀頂はこの地方に生息している鶴頂鳥の頭(腦蓋骨)を言ったもの。『瀛涯勝覽』旧港国(宋代の三仏齊国、パレンバン地方)の条に、鶴頂鳥大如鴨、毛黒、頸長、嘴尖、其腦蓋骨厚寸余、外紅裏如黄蠟之嬌甚可愛、謂之鶴頂、堪作腰刀、靶、鞘、擠機之類⁽²²⁾。

とある。すなわち、鶴頂鳥の腦蓋骨の厚さが一寸あまりあり、蓋骨の外側が紅く、裏側が黄蠟(Bees-wax)のような嬌(なまめかしさ)があつて甚だよろしい。これを鶴頂という。さかんに腰刀の靶(つか)、鞘(さや)、擠機(弓懸^{がけ}のこと。弓を射る時につかう。右手の親指にはめる道具であろう。)の類が「雀頂」で作られた。

阿魯国の住民が貿易品にしていた竜腦はアル国(阿魯国)に近い所にある山(あるいはアル国内にあったのか不明)で産出することであつた。鄭和の『航海図』によれば亜路国(阿魯国、啞魯国)の東(現代の地図では東南)に班卒「山」(賓宰国)を記している⁽²³⁾。宋代の賓宰国とは最良の竜腦の産出地を漠然と示したものと考えられるから、このアル国に近い山(深山窮谷)が賓宰国等に一致するのではなからうか。時代は近代になるが、十九世紀には内陸部トバ湖のあるタパヌリ地方に竜腦と安息香(Benzoin、本稿ではふれない)が取れたという。すなわち、一八〇二年タパヌリへ寄港し、同年二月十二日にソマセット公爵夫人に報告書を書いたラッフルズはその中で、「今私は竜腦と安息香がいっぱい、自然科学者にとつても哲学者にとつても興味にあふれたバタク地方の中心地タパヌリを出たところです。……」⁽²⁴⁾と記している。明代のバタック族の国那孤兒はサムドラ(蘇門答刺)の西部の山村であつた⁽²⁵⁾。竜腦産出地の範圍如何によっては賓宰国の位置も変化してくることにな

るが、今まで利用した史料から考えると、トバ湖を中心としたかなり広い地域が竜腦の産地すなわち賓宰国であったと考えてもいいのではなからうか。

五、むすび

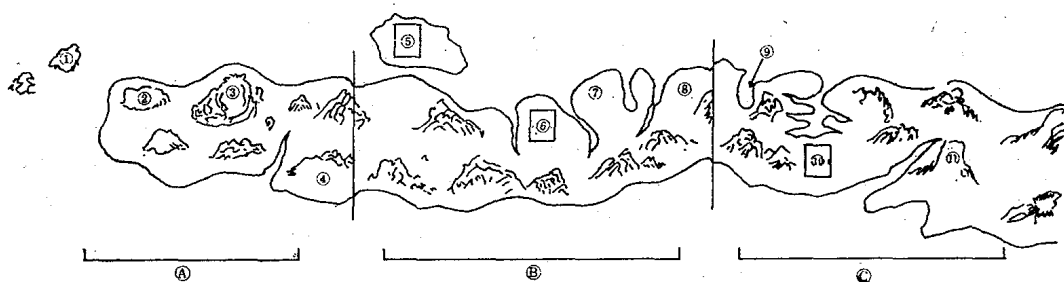
十五世紀、明代費信の書『星槎勝覽』は、スマトラ島東岸北部の阿魯国（Aru 地方）の産物に「雀頂かくちやう（ある鳥の腦蓋骨で刀の鞘等さやに使用する）、片腦、米腦、糖腦」を上げていている。ところが、片腦等の竜腦は住民が山に入って取ってくるという。すなわち、竜腦樹はアル国に近い（あるいは内部）所の山中に生ずるのである。同じく、明代馬歙の『瀛涯勝覽』によれば、啞魯国（＝阿魯国）の西側には蘇門答刺 Samudra（パセ地方）があり、蘇門答刺の西側に那孤児、黎代の二小国がある。その西側すなわちスマトラ島の西北部の広い範囲に南淳里国がある。

馬歙の南淳里国は十三世紀のマルコ・ポーロの旅行記にある Lanbri 王国のことと考えられる。マルコ・ポーロは Lanbri 国の次に世界中でもっとも良質のカンフォール

（竜腦）を産出するという Fansur 国について述べた。

九世紀のアラブ人の『中国とインド物語』Akhbār as-Sin wal-Hind（前稿三九―四〇頁）によれば、Lanbri 国には沢山の黄金があり、Fansour という土地（場所）に最良の竜腦を産出するとあった。この Fansour 国はマルコ・ポーロの Fansur 国のことと思える。またアラブ人の Fansour 国は前稿で述べたように、宋の『諸蕃志』に賓宰国・元の『島夷志略』に班卒国、明の『鄭和航海図』に班卒〔山〕として中国に伝えられた。しかし、明代の『星槎勝覽』や『瀛涯勝覽』には賓宰国に類する名称はないようである。

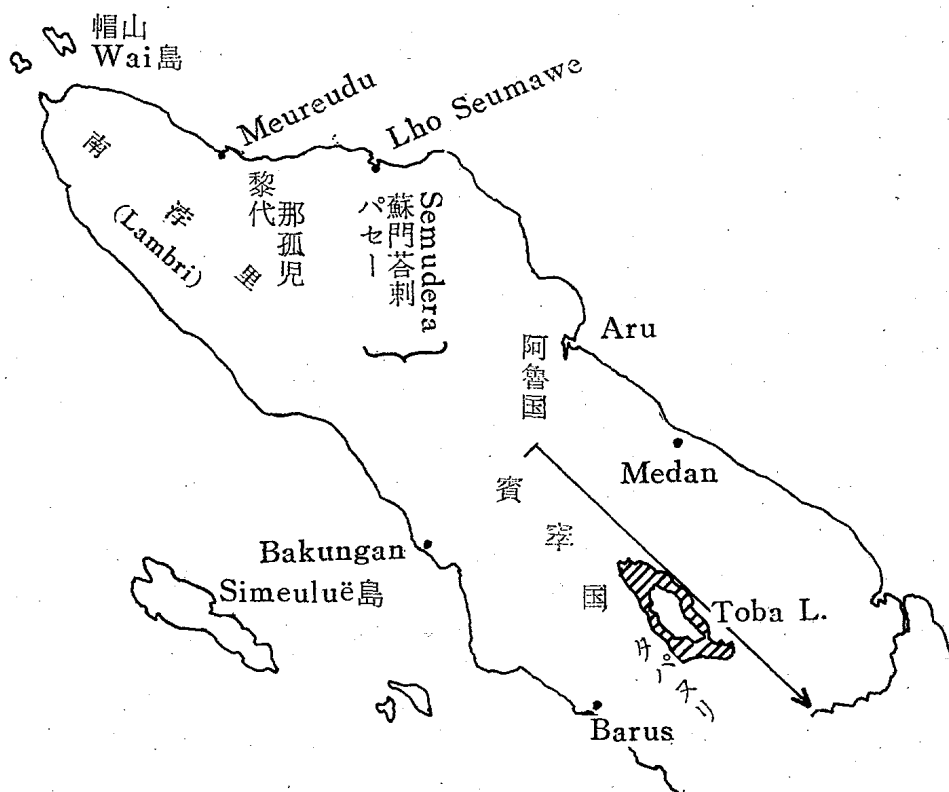
十六世紀になり、ポルトガル人は竜腦の取引地スマトラ島西岸のバルスにやって来たが、その地をアラブ人等はパシシュールと呼んでいたという。ところがスマトラ島民はこの地をバルスと呼んでいる（前稿、四一頁）。そしてトメ・ピレスによれば竜腦は山間部メナンカボ族を中心とする国から、西岸バルス等や東岸の主要港に持たらされていたようである。



- | | | |
|--------|--------|-------|
| ① 帽山 | ⑤ 官廠 | ⑨ 甘杯港 |
| ② 南巫星 | ⑥ 蘇門答刺 | ⑩ 班路 |
| ③ 屏風山 | ⑦ 急水灣 | ⑪ 班卒 |
| ④ 大小花面 | ⑧ 巴碌頭 | |

茅元儀『武備志』卷二百四十、十七頁 (B、C)、十八頁 (A) より。明代のスマトラ島西北部の航海図 (『鄭和航海図』)

那沒嚒 (Lamuri) 洋



スマトラ島西北部略図
縮尺…… 1/5,800,000

以上の史料から考えると、アラブ人の *Fantsour* 国や『諸蕃志』の賓宰国はスマトラ島西北部の最良の竜腦の取れる山間地方を示していることになる。それでは宋代の賓宰国の位置はどこかという事になるが、明代の記事とトメ・ピレスの書から考えると、東岸のアル国、西北岸地方のラムリ国、西岸バルスに近い所の山間地方と言う以外には具体的に述べることができない。ただ、十九世紀のラッフズの手紙文も参考になるようで、内陸部トバ湖のあるタパヌリ地方を中心とする広い範圍を漠然と指していたのではないかと思える。『諸蕃志』の記事から考えて、竜腦樹のある山中にはアラブ人等の貿易商人にはとても入れる所ではないようで、スマトラ島民にとっても海岸地方に住む住民には竜腦を求める為に深山に入るのは困難が伴うようで、竜腦採取民は山間地方に住む住民が主ではなかったろうかと思える。

註

- (1) F. Hirth and W. W. Rockhill, *Chau Ju-Kua*, p. 193.
馮承鈞、諸蕃志校註、中華民國二十九年(一九四〇)、九五頁。

『諸蕃志』の賓宰国と竜腦・補論

- (2) 元、馬端臨『文献通考』卷三百三十二、三仏齊の条に「其国在海中扼諸蕃舟車往来之咽喉、若商船過不入即出船合戰、期以必死、故諸国之舟輻湊焉。」とあるので「諸国」とした。通考は殿本(中華民國五十二年一九六三)によった。

- (3) John Masefield, *The Travels of Marco Polo* (Everyman's Library, No. 305), p. 346.

- (4) Aldo Ricci and E. Denison Ross, *The Travels of Marco Polo, Translated into English from the text of L. F. Benedetto* (by Professor Aldo Ricci, with an Introduction and Index by Sir E. Denison Ross, London, 1931), pp. 287-288.

- (5) 前掲、*Chau Ju-Kua*, p. 193.

- (6) 前掲、諸蕃志校註、九五頁。

- (7) 山田憲太郎『東亞香料史研究』(昭和五十一年二月)、三八頁。

- (8) 版本等については石田幹之助『南海に関する支那史料』(昭和二十年四月)、二八〇—二八一頁。石田博士によると費信が加ったのは鄭和の第三回・第四回・第七回の遠征と、第三、四回の間、永楽十年に少監楊敏一行のベンガル招諭の時と、合せて四回ということである。

- (9) 馮承鈞、星槎勝覽校註、中華民國二十七年(一九三八年)、後集二十七頁。

- (10) 石田、前掲書、二六五—二八〇頁。Mills氏(註16)、八一

十五頁。

- (11) 馮承鈞、瀛涯勝覽校注、中華民國二十四(一九三五)年七月、二六頁。
- (12) 前掲、瀛涯勝覽校注、二十七頁。
- (13) 前掲、星槎勝覽校注、前集二三頁。
- (14) 前掲、瀛涯勝覽校注、三十一—三十四頁。
- (15) 生田滋訳・注、池上岑夫訳、加藤栄一訳・註、長岡新治郎・註、『トメ・ピルス東方諸國記』(一九六六年一〇月)、二六六頁。
- (16) J. V. G. Mills, MA HUAN: *Ying-Yai Seng-Lan, 'The overall survey of ocean's shores'*, [1433], Translated from the Chinese text edited by Feng ch'eng-chün with introduction, notes and appendices, *published for the Hakluyt Society* (Cambridge, 1970), p. 115, n. 5.
- (17) 前掲、『東方諸國記』、二六三—二六四頁。
- (18) 前掲、J. V. G. Mills, MA HUAN, p. 122, n. 1.
- (19) P. Pelliot, "Les grand voyages maritimes chinois au début du XV^e siècle", *T'oung Pao* (1933), vol. 30, p. 403.
- (20) 前掲、A. Ricci and E. D. Ross, *The Travels of Marco Polo*, p. 287.
- (21) 前掲、『東方諸國記』、二七三—二七四頁。前掲、J. V. G. Mills, MA HUAN, p. 114, n. 5.
- (22) 前掲、瀛涯勝覽校注、十七—十八頁。
- (23) 明末天啓元年(一六二二)茅元儀『武備志』、卷二百四十、和刻本明清資料集(汲古書院)。附図は筆者の複写による。
- (24) 別技篤彦『東南アジア地域研究史序説』——ラッフルズの業績を中心として——(一九七六年序、一九七七年刊)、二二二頁。
- (25) 前掲、J. V. G. Mills, MA HUAN, p. 121, n. 2. —一九七七年四月稿—